お茶の水女子大学の行方

―途上国の女性たちとともに学ぶ場として―

本田　和子　学長

アフガニスタンの女子教育支援が本格化する。奈良女子大・津田塾大・東京女子大・日本女子大の五つがコンソーシアムを形成し、協力し合いつつアフガニスタンの女性教員を日本に招いて研修の機会を提供しようとする試みであるが、このことについては、先般、簡単にお知らせしたことがある。

本田和子（まさこ）学長

私たちは、いま、途上国の女子教育支援は、日本の女子大学、特に国立女子大学が担うべき重要な責務と考えている。明治近代化以降、速やかな教育立国を志したわが国は、欧米先進国の援助と協力を得て、短期間で教育水準を高度化することに成功した。女子教育も例外ではなく、取り分け、第二次大戦後の教育改革期には、アメリカ教育使節団による強力な支援を得て、今日のような女子大学の誕生を見たことを忘れてはならない。現在の私たちの大学が、内外の有識者たちの女子教育に注がれる熱意の結晶であること、取り分け、国民の税金によってそれが実現されたことを思うなら、これまでに受けた様々な恩恵に報いる術を考えるべきであろう。本学が、今後、女子教育の黎明期にある途上国のために些かの力を提供することは、これらの恩恵に答えるためにも極めて重要な活動と言えよう。

さて、この企ての一つが愈々実現の機を迎えて、二月初旬から二〇名の女性たちが来日されることになった。ダリ語を話す人が多いとかいう研修団とどのように対応し、どのように研修の実を上げたらよいかと、五女子大学の関係者たちは、いま、知恵を絞りあっているが、ここで産み出された名案の一つが、学生たちの異文化インターンを兼ねた支援活動の組織化である。来日グループに学生が二人ずつペアで付き添い、一日の行動に目配りしつつ必要な援助の手を延べるという試み。勿論、ダリ語の通訳は付くのだが、何しろ地下鉄に乗ったこともないという一行に付き添って、細々としたその必要に応えるのは、たった一人の通訳の手に余る仕事に相違ない。そこを補うのが学生達の勤め。参加する学生にとっては、言葉の通じない人たちと行動を共にするために、どのようにコミュニケーションを図ったらよいかを模索するこの上もない機会となった。

国際化とは単に欧米の大学と交流したり、外国語が上達して外国事情に詳しくなることだけでなく、どんな地域のどんな文化を持った人々とも、共に生きる仲間として手を取り合う努力をすること、そして、一人一人、自分に何が出来るかを模索し、可能な試みを通して共生の実を上げることに他なるまい。研修団の来日を捉えて、こんな格好の教育実践が展開されることを心から嬉しく、感謝している。途上国支援は、単に国際貢献のための大学の事業であるだけでなく、ここで学ぶ学生たちが真の国際人として成長するための貴重な教育機会と思うからである。

大学院博士課程での日仏学術交流が始まる

室伏きみ子　理学部長

お茶の水女子大学を含む、日本、フランスの約六〇大学と研究機関が、共同で博士課程を設置することに合意し、平成十四年九月十三日に、パリ市内の大学学長会議（CPU）において、日仏共同博士課程（コレージュ・ドクトラル・フランコ・ジャポネ）協定締結の調印式が行われました。本学からは、本田学長の代理として、私がこの調印式に出席しました。

日仏共同博士課程調印式
調印者は日本側コンソーシアム代表の東京農工大学宮田学長(右)と、副代表の明治大学山田学長(左)
後ろ中央がクローディ・エニュウエル女史

これは、日仏の博士課程大学院生の交流を通じた学術交流を促進することを目的に、それぞれの国でコンソーシアムを創設し、両コンソーシアム間での協定締結が行われたものです。

このプロジェクトには、日本側からは、本学、東京農工大、東工大、一橋大、都立大、

明大、早大、立命館大などの国公私立二六大学と一研究所、フランス側からは、ストラスブール、パリ、グルノーブル、マルセイユなどの国立の主要三五大学が参加します。締結式当日には、各大学の学長をはじめ、フランスの研究・新技術担当大臣クローディ・エニュウエル女史や、外務省・科学大学研究交流担当局長ベトン・ドレーグ女史、また小倉和夫駐仏日本大使も出席され、とても盛大な式になりました。

この協定の下で、大学院博士課程に在籍する学生が、三年間の在学期間のうち、原則一年間を相手国の協定大学において研究指導を受けます。そして、その学生は、両国の指導教官の下で一つの学位論文を仕上げ、両国の学位を同時に取得することができます。派遣学生は毎年それぞれの国から三〇人程度が予定され、その学生達には、それぞれの政府から奨学金が給付され、協定大学では学生の入学金や授業料は免除されることになっています。今年に入って、来年度の派遣学生の募集が早速開始され、本学からも候補者が推薦されました。

これまで米国一辺倒だった日本の姿勢を見直し、古い歴史と哲学の基盤に立ったフランスとの間に若い人々の交流を広げることで、広い国際的な視野からものごとを考え判断できる研究者を育てることが出来るとの期待が、このプロジェクトに寄せられています。

緒方貞子氏名誉博士称号授与式

平成十四年十二月十八日（水）本学講堂（徽音堂）において、緒方貞子氏の本学名誉博士称号授与式が行われました。

この授与は平成十四年七月に名誉博士第一号として決定していましたが、多忙な緒方氏の帰国に合わせて計画されました。

授与式の学長挨拶で、女史の、国境・人種・性別を超えた卓越した業績を讃え、同時代に生き共感できたことへの誇りと、それが若い女子学生にも励みとなるであろう事を授与理由として述べました。

引き続き緒方氏は挨拶で、この栄誉を一緒に働いた人達と分かち合いたい旨と、教育こそが一番創造的事業で、難民に対しても個々に長く残せたと実感できた分野であること、これからお茶の水女子大学がやろうとしているアフガニスタン女子教育支援もその一環として有意である旨を述べられました。

緒方貞子氏のプロフィール

一九二七年九月十六日生まれ
一九五一年　聖心女子大学　文学部　卒業
一九五三年　ジョージタウン大学　修士号取得
一九六三年　カリフォルニア大学バークレー校博士号取得
一九六五年　国際基督教大学・聖心女子大学で講師
一九七四年　国際基督教大学助教授（～七六）
一九七六年　国連日本政府代表部公使（～七八）
一九七八年　ユニセフ執行理事会議長
一九七九年　国連日本政府代表部特命全権公使
一九八〇年　上智大学外国語学部教授（～九一）
一九八二年　国連人権委員会　日本政府代表（～八五）
一九八三年　国際人権問題委員会委員（～八七）
一九八四年　日米欧委員会委員
一九八六年　国際開発研究センター理事
一九八九年　上智大学外国語学部長（～九〇）
一九九一年一月　国連難民高等弁務官（通算三期～〇〇）
二〇〇一年五月　フォード財団　研究員（～現職）
二〇〇一年六月　人間の安全保障委員会共同議長（～現職）
二〇〇一年十一月　アフガニスタン支援総理特別代表（～現職）

緒方貞子名誉博士による記念講演に続き、同氏をパネリストに交えて五女子大学コンソーシアムの学長によるアフガニスタン女子教育支援シンポジウムが行われました。

（編集室　福島）

アフガニスタン女子教育支援シンポジウム

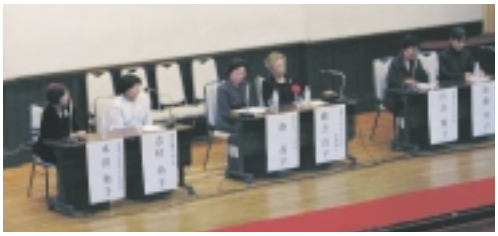
平野由紀子　人間文化研究科長
（当該シンポジウム司会）

次に引用するのは満杯の徽音堂の二階で緒方氏の講演を聞いた本学附属中学生の考えたことの一部です。

・アフガニスタンは今、大変な状況であることは知っていたが、まさか病気で五歳に満たない子どもたちの四人に一人が死んでしまうなどという状況であったことは知らず、とても、ショックを受けました。また、九〇％から九五％のアフガン女性は自分たちの国で使われている言葉の読み書きができないということに驚きました。

・アフガニスタンを支援する背景にはいろいろな人たちの努力が必要とされていることがわかった。まず、二つの段階があり、アフガンにはちゃんと機能する国家がまだない。また社会的なことも支援しなくてはな

らない。国家を作るといってもそう簡単にできるものではなく、また、ちゃんと機能する国家をつくるなんて、とても、難しいと思った。子どもたちや女性たちのために学校を作ったり食料を与えることもしなくてはならない。


シンポジウムでのパネリスト

緒方貞子氏の講演は深い感銘をあたえました。

普段自分たちが当たり前のようにしている行動、「水を飲むこと」「学校へ行くこと」…そういうことが困難な人々がいること、平和な場所で安心して勉強ができるということは奇跡といってもよいことといった感想に続き、僕らが出来ることはアフガンについてもっと詳しくなること、小さなことでもアフガンのためになることをしたい、とあります（附属中学校ホームページから）。

私たちは、女性、子ども、共生をこれからの世界の重要なキイワードであると考えています。まさに、女子教育なくして社会の将来はない、と考える五女子大学コンソウシアムはアフガン復興の支援の中心に女子教育を据えています。私たちの国も、百年前は次のようでした。「ここに群がる子どもたちは親たちと同じように虫に喰われ、税金のために貧窮の生活を送るであろう」（イサベラ・バード『日本奥地紀行』一八八〇年）。

昭和二十四年の行啓以来なかったことでしたが、皇后陛下をお迎えしての「緒方貞子氏名誉博士称号授与・アフガニスタン女子教育支援シンポジウム記念レセプション」は、このように考えると大変有意義なことでした。

地上の星たち

理学部生物学科教授　最上　善広

二〇〇三年の幕開けとともに、新堀真希さん（大学院・ライフサイエンス専攻一年）が宇宙での夢の実現に踏み出しました。新堀さんは、宇宙微小重力でのメダカの稚魚の遊泳と、帰還後の地球重力への順応過程を研究するために、ＮＡＳＡが主催した学生向けの宇宙実験プログラム（ＳＴＡＲＳ）に参加しています。一月十六日（現地時間）に打ち上げられたスペースシャトルは約二週間の飛行後に地上に帰ってきます（この文章を書いている時点では、実験はまだ完結していません）。

日本人の宇宙飛行士が誕生してから、宇宙が多少は身近になったとは言え、まだまだ遙か彼方の世界というのが宇宙に対する一般的な感覚です。しかし、宇宙飛行士にならずとも、宇宙環境のユーザーとして実験に参加することで、宇宙へ近づくことが出来ます。

新堀さんとフライト装置

新堀さん以外にも、宇宙実験経験者もしくは宇宙実験を目指して準備中のお茶の水女子大学（以降「本学」または「お茶大」と表記）関係者が大勢います。ここではその人たちの紹介をしましょう。

初めは黒谷明美さん。本学生物学科の卒業生で、現在は宇宙科学研究所の助教授です。日本の宇宙生物実験のパイオニアとして、ＴＢＳの宇宙特派員と一緒にアマガエルを宇宙に送り出した実験を皮切りに、向井千秋さんと一緒にスペースシャトルでのイモリの産卵と発生の実験も行っています。現在も館山の本学理学部附属臨海実験所と共同で、宇宙でのミネラル代謝を調べる実験を計画中です。

次は、石川島播磨重工業主任研究員の内田美佐子さん。本学物理学科の出身で、材料科学のスペシャリストです。内田さんはＭＳＬ－１ミッションで、材料実験の主任研究員として紅一点、ミッションの重要ポストを勤められました。その後も、ロケットの弾道飛行を使った微小重力実験などで大活躍です。

異色は、石黒節子先生。表象芸術論の立場から、宇宙微小重力を利用しようとなさっています。天女の舞の美しさは、重力から解き放たれてはじめて実現される、そんな先生のお考えが実行に移されるのも遠くはないでしょう。

また、本学化学科の森義

航空機を使った微小重力中での舞い実験